

戦争中の中学生生活

小宮 幸雄

東中野三丁目

戦時中の中学生

私が中学校へ入学した時は、前年の十二月八日、日米戦争が始まり、世の中はラジオ放送の大本営発表で戦勝気分が一杯の中でした。

中学一年生の十三歳ですが、学校の制服は、帽子が戦闘帽、足にはゲートル、革靴、腰には手拭を折りたたんで下げ、まるで小さな兵隊さんでした。この姿で毎日電車に乗って通学していました。

いとこはお茶の水、私は恵比寿駅まででした。その頃も電車は満員ギューギュー詰めで、肩に掛けたカバンは重く潰されていました。

学校の授業は毎日朝八時の朝礼から始まります。全校生が校庭に整列し、上級生の吹く軍隊ラッパで国旗掲揚塔に日の丸を掲げるのがきまりでした。

学校には退役軍人で陸軍小尉の教官が軍服を着て、毎日生徒に軍事教練を教えていました。私達も「カシラーナカッ」と言

う号令で敬礼する事を一番最初に教えられます。そのあと挙手の礼で挨拶する事でした。朝夕の登下校の時、先生方や上級生に会った時は、こちらから先に敬礼をしなければなりません。これを忘れると後で呼び出されて殴られる者もいました。これは校則でした。しかし遅刻しても、忘れ物をして先生に理由を言えば殴られる事はありませんでした。先生方は背広にネクタイをつけた温厚な方が多かったです。

私の通った中学校では、外国語の教科に英語と中国語の二教科がありました。中国語は特に珍しくて面白く、みんなに人気がありました。しかし二年生になると、中国語も英語も教育が禁止になりました。そして、ある日、英語の先生は日の丸の旗を肩から斜めに掛け、校庭の号令台の上から全校生に向かって、度の強いメガネの下の眼を空に向け無念そうに挨拶をすると出征していきました。

その頃から私達は勤労働員令によって外で働く事が多くなり、勉強は半分位になってしまいました。その上体育や音楽の時間

は全て軍事教練に変えられる様になりました。

しかし楽しい授業もありました。それは歴史の時間で、渡辺先生とおっしゃる温厚な方でしたが、声の通る、小柄でしたががっしりした体格の方でした。その先生の東洋史の時間に、吉川英治の三国史を何時間もかけて読んでくれました。黒板に昔の中国大陆の地図を一杯に書き、智将、豪傑の名を書き、活躍ぶりを中国の歴史背景をまじえて教えてくれました。その面白さに時間を忘れ、みんな静かに聴き入っていました。今でも懐かしく思い出します。

しかし、その渡辺先生も校庭の壇上から胸に掛けた日の丸の旗を握りながら、大きな声で全校生に挨拶をし、「この戦争は早く終らせねばならない」と叫ぶと、校長先生があわてて手で制止するという事がありドキッとしたものです。当時の先生方も生徒には言えぬ忍従の時代だったとおもいます。「これからの若い諸君に期待をしています」と先生は言葉を結び、跳び降りる様に壇からおりと、校長先生と向き合っていました。生徒である私達は黙って見ていました。そして全員で「バンザイ、バンザイ」と校長先生の音頭で叫びました。

出征して行かれた先生は、その他何人かおられました。私達が終戦後、卒業する時になっても、帰ってこられた先生は一人もいませんでした。

軍事教練

軍事教練は、当時の中学生にとっては何の疑いも無く、ただ従順に従うだけでした。なぜなら小学生の頃から、普段友達と遊ぶオモチャから、読む雑誌、マンガ本、絵本、学校で習う教科書に到るものすべて、兵隊さんの話と、忠君愛国物語が多く自然と頭の先から足の先まで軍国少年になっていました。

昭和十一年に二・二六事件があり、その年の四月に小学校へ入学したのです。翌年中戦争が始まると、学校ではますます軍事色が濃くなり、私達子供も、先生の教えに従う、文字どおり良い子に育てられていきました。毎月一日と十五日には、お弁当は梅干し一つの日の丸弁当で、机の上に広げると先生が調べて廻るといふ具合でした。そして、全校生徒が揃って、氷川神社へ参拝するのが決まっていました。

昭和十六年、太平洋戦争が勃発し、その翌年私達は中学校へ入学したのです。だから軍事教練をするのに何の抵抗も抱きませんでした。中学一、二年生の頃はまだ世の中それ程戦争の雰囲気も切迫していないので、私達も先生もどこかゆとりがありました。

しかし昭和十九年、三年生になり、学校へ配属将校が赴任してくると、軍事教練は授業を振り替えて行う様になってきました。集団訓練は銃を持って整列し、腰に剣を下げ、銃の構えかた、撃ちかた、とだんだん厳しくなってきました。

三年生の五月には、千葉県習志野の陸軍兵舎で四泊五日の軍

事教育をしました。軍隊ラッパで起床し、夜は非常呼集で跳び起きるといふ、眠いつらい訓練でした。クラスも中隊、小隊、分隊とわけられました。

この集団訓練は、今考えると何だったのか。昭和十九年の頃には、戦争は次第に切迫してくる時代でした。南方の島では玉砕して撤退するニュースが入り始めた頃でした。十一月にはB29爆撃機の初空襲となってきました。昭和二〇年、四年生になると、今度は静岡県の富士山麓の陸軍兵舎での訓練がありました。

その頃の私の家は、四月の東中野地区空襲で焼け、近くの焼け残った家を借りて両親、兄と暮らしていました。それでもこの教練には参加する様にいわれ、背のう銃剣姿での軍事教練は、五月二五日から四日間でした。夜間訓練、戦闘訓練は機関銃をかっついで行軍で、箱根まで銃の重さにまいりました。みんな夜ぐったりしていると、不寝番の生徒が、「空襲警報だぞ。東京の方の空が赤いぞ」と叫ぶ声でみんな真つ暗な外へ出てきました。その空襲は、クラスの何人かの家が焼けたときでした。私も二度目の戦災でした。

軍事教練が終わって東中野駅を降りて家へ帰ってみると、焼け跡に立て看板が立ててあり、前の焼け跡にいる、と書いてあるので驚きました。軍事教練は私達ばかりではありません。先生方も同じ様に配属将校に命令されていました。

私達は中学校へ入学してから一度も夏休みを楽しんだ記憶がありません。戦時中という環境は、若者にとって、将来の展望も、明るい希望も、すべて降り注ぐ焼夷弾の煙りと炎で消えてしまう灰色の時代でした。

学徒勤労動員

昭和十八年私は中学二年生になると、学徒勤労動員令により、西武線小平駅の近くにあった陸軍補給廠で働くことになりました。朝、星のでている時間に家を出て、薄暗くなった道を帰る日がか月程続きました。仕事は野外で学生七、八人に指導員が一人ついて、軍用車両のタイヤを荷作りし積む仕事でした。素手で荒縄を扱うので、みんな手がガサガサになりました。

食糧は配給の時代だったので、お弁当には母親は大変だっただと思います。友達の中には、ご飯の代わりに芋を持ってくる者もいました。小平の辺りはまだ畑も多かったので、芋の買い出しに行く人もいると聞き、私達も帰り道、農家の家の庭を尋ね、お願いして自家用の芋を分けて貰った事がありました。農家の人もまだ小さい学生が可哀そうに思ったのでしょう。

三年生になると、強制疎開の建物を測量する役所の人の手伝いをしました。新宿青梅街道に面したビル事務所、薄暗い廊下を覚えています。昭和十九年の暑い夏の事でした。すぐ近くにあった雑炊食堂では、私達学生は、大勢並んで待っているのに特別に早く食べさせてくれました。あの太った優しいおじさん、

覚えていません。思い出すことは、悲しく情けないことに食べる事ばかりです。

中学四年生になると、私達の学校は工業学校だったので、実習工場があり、機械がズラリと並んでいました。学校はその工場を、軍の指定工場にして、私達をそこで働かせる事にしました。航空機の部品を測定する工具の製造仕上げの仕事でした。親工場から指導員が二人きて、私達はその人達を先生と呼んでいました。

戦争も昭和二〇年に入り、昏間も空襲警報が鳴る様になってきました。しかし、防空壕にも入らず、頭上で空中戦があるのを見んな見ていました。友達の中には、志願して少年航空兵になって学校を出ていく者も級に五人もいました。

三月十日の大空襲があつてから、学校警備の為交替で宿直もしました。私達も大変でしたが、先生方もご自分の家庭と学校と、宿直と、年輩の先生が多くなつて気の毒なくらいでした。今考えると、あの勤労働員の頃は、夏休みは一度も無く、しかも賃金を貰った記憶がまったくありません。誰も何も言わなかったのが不思議です。

終戦と勉強再開

八月十五日、終戦の天皇陛下の玉音放送は、焼跡に建てたバラック小屋の中で、家族と近所の焼跡仲間と一緒に雑音まじりのラジオで聞きました。初めて聞く天皇陛下のお声……私達子

供の頃からの軍国少年としてはア然としました。

ひとつは何を言っておられるのかその言葉の難しさと、抑揚の無い声が雑音にまじつて、よくわかりませんでした。大人達は一言、「戦争は終わったよ」だけでした。私達中学生にとっては、物ごころついた頃から日本は戦争をしていました。戦争の無い世の中は、どんな風になるのか想像もつきませんでした。唯、大人達が、「アメリカ軍の兵隊が上陸してきて何をするかわからないぞ」と言う事が不安でした。

夕方、暗くなつてきてから、電灯は覆いを掛けなくていいんだ、というのが嬉しくて、外へ回つて焼けトタンを張りつけたバラック小屋のすきまから、電気の光が洩れるのを見て何か久しぶりに見た様な気がしました。これからは空襲が無い！ 足にゲートルを巻いたまま寝なくていいんだ！ それだけで安心感が解放感になつて、わくわくしたのをおぼえています。

それから数日間は、朝から日の丸を付けた戦闘機が頭の上を低空で飛んできたのに驚きました。それ迄空襲があつても一機も姿を見せなかつたのに、この飛行機はどこからきたんだ。おまけに最新型の秘密といわれた飛行機迄爆音をあげて目の前近くに飛んでいる。戦争が終わつてから飛んでみせて……。軍国少年としては多いに不満でした。

翌日学校へ行くと、友達は、勤労働員さきの工場が閉鎖でみんな集まつて騒いでいました。これからの授業は、教科書は、

先生は。始まった授業は自習の多い日が続きました。

そんな或る日、突然進駐軍のアメリカ兵が数人学校へ調査にきました。当時、学校には軍事教練用の銃をしまつて置く兵器庫があったのです。彼等はその兵器庫の銃を見ると声をあげて驚き、校庭に出す様に命じ、銃、機関銃、木銃、それに引きだしの中の火薬の入った薬きょう等を並べさせた。私達生徒は皆窓からそれをみていた。

彼等は何に銃と火薬の入った薬きょうは押収し、残りの木銃、銃剣道の道具は校庭の真ん中に積みあげ、火をつけて燃やす事を命じました。その煙はいつまでもくすぶっていました。

学校の授業は、以前の様に始まりましたが、先生の数が少ない為自習時間が多く、時々校長先生が授業にお出になる様になりました。校長先生は授業にその日の新聞を持ってこられて、一時間かけて記事を読んで解説してくれました。私達はそれによって、随分時代の変化を教えてもらった気がします。

その学期末の試験問題は、論文で全員に「自由主義について、新聞の社説風を書け」というのが出題でした。中学生の私達に説明する時代の変化を、あの当時の先生方は、非常に優しい態度で慈愛に満ちた教えかただったと思います。先生方も戦時中私達に教えた、忠君愛国、鬼畜米英と神国日本、その落差をどの様に教えるか随分悩んだ事と思います。

しかし、その時私達が新聞記事から教えてもらった事が、今

になって考えると一番その後の変化に対する基礎になっている様に思います。

昭和二十二年三月、私達は卒業しましたが、日の丸の旗を胸に掛けて私達の前で別れの挨拶をなさった先生方は教壇に帰ってはきませんでした。